

キッシンジャー、死してなお

遠藤 乾 (東京大学大学院法学政治学研究科教授)



写真：ロイター/アフロ

2023年11月末、100歳でヘンリー・キッシンジャー博士が他界した。言うまでもなく、1968年から77年まで米政権の中枢にあって、ベトナム戦争、米中国交正常化、米ソデタント、第4次中東戦争などの動乱期の外交を文字通り仕切っていた人物である。それらの時期の前後、当初は学界にあり、その後も世界の指導者と結び、影響は長期にわたって維持された。当然おびただしい数の追悼文が各地で寄せられた。

その多くは、キッシンジャーという論争的な存在を映し出している。とくに彼のリアル・ポリティークを礼賛するものから、その影である戦争犯罪や人権軽視を問題視するものまで、棺を蓋いてなお事が定まらない。ここでは、彼の総合的・包括的な評価とは距離を置く。体系的に彼の人生をカバーし、さまざまな評価を横に並べてできるだけ公平に取り扱おうとする試みとして、ニール・ファーガソンなどの伝記を見ればよい（『キッシンジャー 1923-1968 理想主義者I・II』、日経BP社、2019年 [2015]）。そうではなく、気楽に書くよう命ぜられているこのエッセイでは、いま彼の表明された思考法から学びうることを、また言動の一致・不一致、さらに言わないことを含めて、そこから考えることを、二、三つ抽出することとしたい。

リアル・ポリティークの内実

キッシンジャー後年の名著『外交』（日本経済新聞社、1996年 [1994]）は、彼の奉じるリアル・ポリティークを歴史的に描写する。その要諦は、力の重心と移行の見極め、その先にある死活的な利益の確定である。モデルとなる政治家として、メッテルニヒやビスマルクがよく挙げられるが、デビュー作の『回復された世界平和』（原書房、1976年 [1957]）でも明らかのように、それは誰よりもカースルレーであった。その精密な大陸勢力配置・移行と自国利益の読みが周囲に理解されず、結局自死に至る悲劇の現実政治家である。キッシンジャーにとっていくばくかの留保があったとすれば、国益を棄損する戦争に至らない限り介入しないという島国意識だったかもしれない。（米国政治史の文脈では、セオドア・ローズヴェルトこそ、国益の観念を理解した稀な政治家であった。）

もちろん、メッテルニヒの外交算術は彼を魅了した。メッテルニヒは、誰よりも先んじて紛争の芽を感じ取り摘んでいく。多民族国家ハプスブルグ帝国は、英国と異なり地続きの大陸中枢にあり、民族自決への政治的趨勢のなかで、そうした算術は自国と体制の維持のために不可避だったかもしれない。キッシンジャーは、メッテルニヒがその趨勢を遅らせ、コンセンサスとなる正統主義を軸に大國間協調とその限りでの平和を永らえたことを評価している。しかし、その趨勢を知りつつ、時代に反していった政治的不能性に、キッシンジャーは疑問を感じてもいた。この点、やや皮肉なことに、リアル・ポリティークの観点からメッテルニヒを論じた高坂正堯（『古典外交の成熟と崩壊』（中央公論社、1978年）より、理想主義者として一般には括られる坂本義和のメッテルニヒ論に近い（「ウィーン体制の精神構造」南原繁古希記念論集所収論文、1961年）。そこでは、ナショナリズムと民主ラシーに向かう時代精神へ逆らい、ヨーロッパじゅうで反動マイクロ・マネジメントの介入を繰り返したあげく、結局は2月革命とその後の民主化の動きの中で失脚と亡命を余儀なくされた不能性を体現する政治家として、メッテルニヒが描かれる。

キッシンジャーにとっては、ビスマルクもまた、メッテルニヒ同様にヒーローであったに違いない。臆病なまでの慎慮と抑制は、リアル・ポリティークの一つの証だ。ただし、その過剰な外交算術の結果、誰にも理解されない形でヨーロッパじゅうに複雑な同盟網が張り巡らされるようになると、勢力均衡の逆機能を感じ取ってもいたはずである。

『外交』を紐解いて痛快なのは、これらのモデルの叙述というより、彼らのような大政治家のスタンダードに満たない者のこき下ろし方であろうか。神聖同盟の一翼を担った露皇帝アレクサンドル一世のきまぐれは、格好のネタだ。戦間期フランスの政治家は、ブリアン含め、押しなべて評価が低く、同国は何をしてよいか分からぬ精神病のなかにいるものと描かれる。ベルリン危機を通じて自ら戦略外交ゲームに乗り出しておいて、突如何も得ぬまま撤退するフルシチョフの不可解さも、世界民主化の志向性とドミノ理論などに惑わされてインドシナという死活的利益のない国・地域に介入していったケネディ・ジョンソン政権の未熟さも、キッシンジャーの容赦ない目から逃れようがない。舌鋒鋭い批判から見えてくるのは、イデオロギーに拘泥したり、敵対国を過大視したり、国益のかかる地域や争点を掛け間違う政治指導者への不寛容である。

ただし、キッシンジャーの人物評には鋭さとともに柔軟さが備わっている。たとえば、レーガンには、善の帝国アメリカの人びとと共鳴し合い、国益計算を超えてその善の自画像を無邪気に世界に投射する——キッシンジャーがウィルソンのものとして唾棄してきたアプローチの——なかで、冷戦の終結への突破口を開いた功績を認め

ている。

また、時折指摘されることではあるが、力の計算を超えた要素を無視しているわけでもない。共通の価値観といったタームで、ウィーン体制がもたらした長い平和を説明する際、自国の力や利益をこえた紐帯の積極的な効果を見てとっている。

最後に、言と動、彼が書くこととするは少しずつずれる。ヴェトナムにおける死活的利益の希薄さにもかかわらず、ドミノなど過度な恐れから介入していった歴代の米政権を批判する一方、みずからもまた、メッテルニッヒよろしく陰謀を企て、チリからアルゼンチン、あるいはインドネシアまで、(彼が危惧する)共産化の芽を一つ一つ摘んでいった。それについて、彼が『外交』で触れることは一切ない。(もっとも、キッシンジャーの目からは、目的と手段が釣り合っており、米軍の犠牲を払うことなく共産化阻止の目的が達せられればよしとすることだろうが。)

したがって、キッシンジャーのリアル・ポリティークを語る際には、要諦を抑えつつ、そのふくらみや柔らかさ、ズレをも同時に捕捉する必要がある。

二の次の周辺・中小国

キッシンジャーがいう勢力均衡が大国中心主義であることに異議を唱える人は少ないだろう。優越的な世界権力である米国の生存や利益を根底から脅かしうるのは、大国だからだ。誤解を恐れずに言えば、それはどこよりもソ連を意味した——加えて、中国がクラブの一員だろう。だから戦略を語る時、それはまず米ソ関係、とりわけ核戦略と心理戦が中心に来る(関連する主著が『核兵器と外交政策』日本外政学会、1958年[1957])。その先に、米ソ中の三極体系が語られる。その戦略的思考の世界的な拡がりの中で、地政学の観点から国や地域(の軽重)が語られる構図だ。

逆に、利益の薄い周辺地域や中小国によって米国の行動や計算が振り回され、ひいては狂わされる事態はあってはならないことだった。その周辺・中小国には、同盟国である西欧諸国も含まれている。

周辺・中小国の「勝手な」ふるまいは、米国の利益にそったもののみ許容される。『外交』のナラティブに従えば、西独ブランド政権による東方政策はその一例だろう。旧敗戦国が鉄のカーテンを超えて自主外交で東側に手を差し伸べたのだ。キッシンジャー大統領補佐官は、もちろん当初警戒するが、西ベルリンの地位とそれへのアクセスが確保されるというボトムラインを確認したのちは、むしろ東方政策を邪魔するほうが米国益に反する結果を生むと判断し、むしろそれを利用していく。フルシチョフが、西ドイツによる東ドイツ(の国境)承認という餌に食いついている間は、米国自身が苦境にあるヴェトナムでの(トンキン湾での冒険行動を含めた)行為をソ連は黙認するだろうと読み、じっさいその機会の窓を活用したという。(もちろん、これもまた自己宣伝である可能性はあり、検証が必要だ。)

周辺地域や中小国の道具化は、キッシンジャーにとってお茶の子さいさいだった。中核的利益の確定や追求とはコインの両面でもあり、彼の思想と行動に体系的だったとってよかろう。ラオスやカンボジアの空爆は、北ヴェトナム兵の補給路や侵入路を寸断し、攻勢を鈍らせ、後退する米軍を守るという戦略的計算でなされたとしても、現地住民のあいだに数万から数十万の犠牲者を出し、その荒野からポルポトと世界最悪のキリング・フィールド

が出現した。周辺国同様人権への配慮は二の次とされ、本件に関してはながらく戦争犯罪が疑われている。

現在にまで影響が及ぶキッシンジャー流周辺・中小国軽視の最大の原罪は、台湾の地位に関するものだろう。もちろん、米中国交正常化は、中ソ対立のさなか、ヴェトナム戦争終結から米ソ冷戦のマネジメントまで、中国を米国にひきつけることで有利に運ぶというリアル・ポリティークの実践例として称賛されるものである。毛沢東支配下の中国が国際政治における流動化の最たる要因だったことに照らすと、その極端な中国をすら国際秩序の中に取り込むことに成功した事例として位置付けることも可能かもしれない。しかし、冷徹な権力・国益計算が貫徹したのか、むしろロマンティズム——キッシンジャーは臆面もなく中国への愛着（affection）を語る——がよぎったのかどうか、疑問なしとしない。

当時の中国がソ連との戦争を極度に恐れており、次いで日本を脅威に考えていたことは周知の事実だが、その恐れは十分交渉で生かされたのかどうか。米中接近のメリットとされたが、中国はヴェトナム戦争終結に向けた交渉において助力を求めた米国の要請をほぼ無視した。取れるものを取れていないだけでなく、譲りすぎたのではないかという疑念もある。交渉過程において、台湾はほとんど話題にならなかったという博士の言明にもかかわらず、それは重大な争点であり続けた。キッシンジャーが、中国側の認識に惹きつけながら、「地政学的な重要性が世界でも最も少ない不動産」（キッシンジャー回顧録『中国』上、岩波現代文庫、2021年、219頁）と呼ぶ台湾について、結局「中国の一部」とする中国政府の立場を認知すると表明するに至った。その後も、台湾に中国との平和統一を促す場面も見られ、一貫して北京の立場を重んじ、台湾を軽視してきたといえよう。

中核的利益はもちろん大国間協調にある。それを基本に据えるとしても、そのネガを予期し、それに対処してこそ、リアルな外交となろう。キッシンジャーの周辺地域・中小国軽視は、先に触れたカンボジアでも見られた体系的なものである。そうした構えが、対中ロマンティズムともあいまって、いまなお戦略的な痛点として極東にも残っていないかどうか、リアル・ポリティークの観点からも、検証に値する。

歴史と自由

最後に、キッシンジャーの思想と行動を考えるうえで、避けて通れないのではないかとと思われるのが、カント思想の受容である。

リアル・ポリティークは、言うまでもなく、規範的である。それは力の使い方についての戒律であり、国家行動のあり方を指し示す道徳的道しるべをなす。この立場は、現実にある力の配置、優勢、重要性に対して、諦めの態度を取ることでもない。揺れ動きを含め、力のありかを見極め、手を打っていく、あるいは下手を打たないという行動指針なのだ。（取り立てて彼が影響を受けたとは思えない）マキャヴェッリにひきつけていけば、運命に跪かず、その女神を掴まえて、意志的に行動すること、その際に、君主は恣意でなく、国の権力維持や増進に資する行動をとること、が近代の新しい国家倫理となる。

キッシンジャーは、学生時代、その読書量で有名だったが、なかでもカントに影響を受けた。そこから彼が学んだのは、自由意志の重要性であった。伝説にもなっているハーバード大学卒業論文「歴史の意味」は、シュペングラー、トインビー、カントを比較し、歴史的決定論と自由意志との関係を論じるものだった。そこでキッシンジャーは、シュペングラーの決定論を、トインビーの目的論同様に退け、カントに依拠する。カントが導入した現象（と

いう人間固有の営為)と物自体との区別のなかに、後者がもたらす一定の制約の中でも、前者に由来する自由な選択が行使されうるといった内的な経験の余地を見出したのである。曰く、「決定論的な宇宙においても自由の余地はある」(ファーガソン、第7章における引用参照)。

ちょうど一世代前のレイモン・アロンが歴史哲学から出発し、歴史の自由解釈(主体)の重要性という根拠からナチズムの否定にたどり着いていたように、学生キッシンジャーもまた、歴史における自由裁量の余地を見出すことで、冷戦初期の激しいイデオロギー的闘争のなかにおいても揺るがない立脚点を見出したのではなかろうか。

のちに展開されるキッシンジャーの外交は、もちろんこの卒業論文から直接導くことはできない。それは個々の具体的な文脈の中で、考案・実行されたものである。しかし、岩盤のように固定化した世界もまた、決定論では語りえず、どこかに自由意志によって揺り動かす余地があるようにと確信していたように思う。米中国交正常化も、米ソ核軍備管理も、ヴェトナム和平も、そして中東シャトル外交も、どれも岩を穿つ作業だったに違いない。

ただし、キッシンジャーの個性の中に余りある野心が、米国の権力中枢にあって自由意志論と結びついたとき、それが万能感に近づくのは不可避だったのかもしれない。外交においては、チリにおける社会主義政権の転覆からアルゼンチンにおける軍事政権の大弾圧への支持にいたるまで、正義の名の下の邪悪な操作に手を染める基盤をもなした可能性が高い。内政においても、ウォーターゲートで弱るニクソンと距離を置きつつ、自身の国家安全保障会議のスタッフから政敵までを盗聴するに至る。有名な話だが、彼はこう口を滑らせた。「違法なこと、これは直ちに行う。違憲なことは、もう少し時間がかかる。」(Washington Post, December 23, 1973)

彼の操作能力は、やっかいなことに、分析の形を採った書物にも沁み込んでいる。もとよりあてにならないと言われた回顧録のみならず、先にあげた『外交』も、読み物として面白すぎ、認識に色が付く。同時代にあってジャーナリストたちがキッシンジャーのウィットと知識、戦略眼に惹きつけられたように、後世を生きる者も、あつというまに彼の世界に引きずり込まれる。

逝ってなお、キッシンジャーは惑わす。それに魅了されず、踊らされず、対話する。それがいま、みずからの戦略眼と外交感覚を養うことにつながろう。